最強の母

一新小学校
三年　徳尾　圭之輔

「きらいだなって思っているでしょう。」
ドキッ
ぼくのきらいな野さいを
お母さんはズバリ言い当てた
ぼくの心の中を見通せるのだろうか
「何でわかると。」
と聞いたらお母さんは
くすっとわらい
「八年もいっしょにいるからお見通しよ。」
と言った
あれ
ぼくも八年間
お母さんといっしょにいるよ
でも
ぼくはお母さんの心の中は見通せないなあ

ぼくの心の中を見通せる
お母さんには
かなわない
最強の母だ

（第三十五回入賞作品）

お母さんのひみつの時間

豊野小学校
三年　山本　惺空

夜中　目が　さめた
ガラスばりのところから
明かりが　もれていた
カチャ　カチャ
「バーチャン、
　アイスコーヒー出してくれん。」
お母さんの声だ
ぼくは　ひっそり
足音を立てずに聞いていた
ばあちゃんとお母さんが
小さい声で話していた
おいしそうにわらって
アイスコーヒーをのんでいた
「なんでこっそりのんでいるのかな。」
ずるいな
と思ったけど
ばあちゃんとお母さんが
あんまり楽しそうだったから
だまって　ねることにした
お母さんは
ぼくを一生けんめい育てているから
これくらい
楽しみがなくっちゃね

（第三十四回入賞作品）

ママのいろいろな顔

城東小学校
三年　佐土原　葉瑠

わたしがやくそくやぶったら
ママおこった顔
しゅくだいぜんぶおわったら
ママわらった顔
しゅくだいをおしえるとき
ママなやみ顔
ほかにも
ママがんばり顔
ママかなし顔
ママねぶそく顔
ママは
いろいろな顔がいっぱいある
そんなママがすき

（第三十三回入賞作品）

ぼくの大好きな時間

南ヶ丘小学校
三年　春日　伸仁

五時三十分
ぼくはそわそわする
家をたんけんしたり
テレビを見たりする

五時三十五分
だんだんぼくはえがおになる
すこしとびはねながら
まどの外をみる

五時四十分
ガチャ
やっとお母さんが帰ってきた
「ただいま」
「おかえり」
心がぽかぽか
あたたかくなる
ぼくの大好きな時間

（第三十一回入賞作品）

お父さんの仕事

菊水小学校
四年　田中　駿太朗

お父さんは消防士だ
朝七時に出ていく
小学校と同じくらい
一週間に四日
消防署に行く
夜でもぐっすりねむれない
消防服を着て
決まった場所で
いつもねている
サイレンがなると
すぐに起き
一分くらいで出勤する
だからいつも
帰ってくるとねている
ぼくが音をたてると
起こしてしまう
お父さんの仕事は
命を守る仕事だ
お父さんが
ねぶそくになると
出勤できなくなる
だからおとうさんのために
起こさないようにしたいな

（第三十五回入賞作品）

ぎゅっとすると

三玉小学校
四年　松島　美羽

朝
「いってきます。」
とわたし
いつもお母さんが
笑顔でぎゅっとしてくれる
「今日も一日　がんばるぞ！」
元気スイッチが入る

夕方
「ただいま。」
とお母さん
顔は笑顔だけど
ふうっとため息

今度は私が笑顔で
ぎゅっとしよう

おフロもあらっておこうかな

（第三十五回入賞作品）

どうしてだろう

託麻南小学校
四年　安永　れい

お父さんのたん生日
毎年あげる
プレゼント
いつまでも
ずっとずっと
車の中で
ほかんしている
わたしは
車にのるたんび
おりがみや
プラバンを見る
きず一つついていない
たいせつにしてくれている
しるし
どうしてすてないのだろう
わたしは
プレゼントを見るたんび
まどのそとを見て
なきそうになる

（第三十三回入賞作品）

すごいお母さん

城東小学校
四年　皿田　龍

お母さんはかた手が使えない
けれどぼくにはできないことが
山ほどできる
りょう理はるんるん楽しそう
運転ブンブンかんたんそう
せんたく物はなんのその
あらいものもなんのその
パソコンうつのもへっちゃらさ
ぼくのお母さんはとてもすごい

でもゆいいつできないことがある
それは　はく手
でも大じょうぶ
お母さんは　はく手しなくてもほめてくれる
ほめてくれるだけで
はく手されているのと一しょさ

（第三十三回入賞作品）